

今月の聖句

『信仰と、希望と、愛、この三つは、
いつまでも残る。その中で最も
大いなるものは、愛である。』

コリントの信徒への手紙一

第13章13節

◎ 9月の予定

- 1日(金) 祭前祭
- 2日(土) ステパノまつり
- 4日(月) ステパノまつり代休
- 5日(火) 給食開始
- 8日(金) 引き渡し訓練
- 12日(火) 内科検診
- 13日(水) 体験学習(中)～15日
- 14日(木) 身体計測(小)
- 15日(金) 身体計測(中)
- 19日(火) 創立記念日
- 21日(木) 午前授業
- 22日(金) 創立記念礼拝・記念式典
- 23日(土) 学校説明会
- 26日(火) 教科テスト期間(中)～28日
- 29日(金) 教職員協議会
- 30日(土) 英語検定



創立七十周年

今年の9月19日で、この聖ステパノ学園は創立七十周年を迎えます。澤田美喜先生が創立された本学園では、その当時から繋いできた変わらない精神を、多くの時間をかけて磨き続けてきました。学園に関わっていただいた全ての人に感謝申し上げます。



昭和34年9月19日東京本郷にて三妻財團の本家岩崎久弥の長女として生まれる。大塚父塾太郎の学名を継いで母美和と自号を勤から1字ずつとって美喜と名付けた。生後10カ月の記念写真。

◎今月の行事から

○ステパノまつり 9月2日
今年度のステパノまつりへの来校に関しましては、保護者と学校関係者を中心にのご案内させていただきます。事前申し込み制の形をとらせていただきます。どうぞご了承ください。

○引き渡し訓練 9月8日
今回の訓練は、引き渡しという形で実施いたします。災害等、実際には起こらないことが一番ですが、いざというときの備えとしてご協力のほどお願い申し上げます。

○創立記念礼拝(七十周年) 9月22日
神様のみ名によって建てられました聖ステパノ学園は、今年七十周年を迎えることができました。

当日は午前と午後に分け、午前中は全校児童生徒と共に、午後は多くのお客様をお招きして、創立記念の礼拝をお献げする予定です。
七十年の歩みは、皆様のお支えあってのことです。感謝申し上げます。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



創立七〇周年を迎えて

理事長 森田 利光

聖ステパノ学園が創立七〇周年を迎えました。心から感謝申し上げます。

七〇年かけてここまで成長して来るには、多くの方々の尊い働き、努力、献身がありました。その一つひとつをあげることはできませんが、今年は記念すべき七〇周年の年ですから、私が直接経験したこと感じたことを思い出しつつ、綴ってみようと思います。

私は二〇〇三年に本学園の理事に就任してから今年でまる二〇年になります。当時の理事・評議員の方々の中には存じ上げている方もいらっしやいましたし、新任理事である私を温かく受け入れてくださいました。ここに来る前には同じ聖公会に属する立教高校と香蘭女学校におりましたので、聖公会関係学校には長い経験がありました。同じ教育理念に基づく学校ですから、基本的には直ぐになじむことが出来ました。本学園の第一印象は、教職員の皆さんが大変熱心にかも温かく児童生徒に接している姿でした。

本学園設立は創設者・澤田美喜先生がお創りになったエリザベス・サンダース・ホームの子どもたちが学齢期になった年にその子どもたちのための教育を行う学校として聖ステパノ学園小学校を設立したことから始まり、さらに六年後に中学校を設立されたことが起

源となっておりあります。それ以来幾多の苦難を乗り越えて今があります。今でこそ立派な施設で児童生徒が嬉々として学校生活をおくつていますが、当時の質素な教育環境で働かれた教職員の方々のご苦労はいかばかりだったでしょうか。多くの難題に対処して、大切な児童生徒たちを育ててこられたご努力に頭が下がります。

創立五〇年を迎えるころから、将来への総合発展計画がえがかれ、必要なものから順次整えていく将来構想が生まれました。そこに至るまでの長い間、限られた状況の中で児童生徒に良き教育指導を実践してこられた先人たちのご苦労ご努力に賛辞を惜しみません。

将来構想に沿って、先ず「海の見えるホール」が建設されました。二〇〇四年秋の竣工です。本学園にとって初めての本格的な建物でした。ステージうしろのカーテンを開けるとはるか前方に相模湾が臨める小高い山の上にごんまりとしたホールができました。パイオルガンの設置も念願が叶いました。全校児童生徒の式典、諸活動、集会をすることは勿論ですが、学校外の地域の方々にも必要に応じて使っていただけるようにとの目的もありました。このホールの建設も勿論ですが、その後の度重なる施設整備の都度、本学園に心を寄せてくださる多くの方々の善意のご協力をいただいで目的を達成してまいりました。心から感謝いたします。感謝を込めてホール入り口にご協力いただいた方々のお名前が記

されております。

「海の見えるホール」の次に、学習環境の整備に着手し、中学生の教室棟「森の中の教室」がホールの直ぐわきに建設されました。やがて小学校新校舎が下の道路沿いに出来ました。そして最後に新しい体育館が竣工し、計画された施設関係はひと通り出来ました。約二〇年かかっています。前理事長・校長の小川正夫先生が構想された施設がほぼ完成し、児童生徒には良い教育施設と環境の中で良い教育ができるようになっていきます。小川先生のご功績大なることは言うまでもありませんが、全教職員の一致した努力と献身のお陰で学園は誇れる施設で児童生徒に良い教育を施すことができるようになりました。

ハード面だけではありません。ソフト面でも全教職員が一丸となって教育に当たり、研修し実践しています。創立五〇周年の時に初めて発行した記念誌「聖ステパノ学園はいま」にこれまでの教職員の努力の跡が残されています。この記念誌（研究紀要）はその後も約五年ごとに発行され、本学園の軌跡が記されています。もう一つ誇るべきは、毎月出されている「ステパノだより」です。これも日ごろの教育活動の全般が記録として残されていて、本学園発展の軌跡が残されています。

聖ステパノ学園の今の姿を、創設者・澤田美喜先生がご覧になったら何とおっしゃるでしょうか。そんなことを思いつつ、今後の道筋を模索していきたいと思います。

校長 佐藤 紀明

聖ステパノ学園の創立記念日は9月19日で、創立者澤田美喜先生の誕生日になります。澤田先生が、神様より命を与えられた時から聖ステパノ学園の歩みが始まりました。歴史と伝統を重ねてきた聖ステパノ学園も創立70周年を迎えることができました。創立70周年を迎えられることは、教職員、在校生にとって、大きな喜びでもあります。これまで学園を支えてくださった多くの方々にこの場をお借りして、心から感謝申し上げます。

澤田先生は三菱財閥初代当主岩崎弥太郎の長男久弥の長女としてお生まれになりました。外交官の澤田廉三と結婚し、ロンドン在任時に訪問した「ドクター・バーナードス・ホーム」の働きに大きな感動を受けます。第二次世界大戦後、望まれずに生まれてきた混血児の母親代わりになると決心し、1948年に児童養護施設「エリザベス・サンダース・ホーム」を設立し、5年後に、大戦中に戦死した三男の洗礼名を祈念して、聖ステパノ学園が設立されました。学園創立の願いには、「失われかけた子ども達の将来を取り戻す力を育み、社会に出ても顔を上げ、胸を張って生きて、キリスト教の信仰による強い自信と、高い誇りを持った立派な日本人としての精神と実力を身につけさせたい。」とあります。

創立当初の澤田先生の話、澤田美喜記念館の前館長、学園旧職員、養護施設旧職員、卒業生OBから聞く機会がありました。時には厳しくも慈愛とユーモアに溢れ「ママ」「ママちゃま」と皆に慕われた存在でした。

経営など様々な困難にも、「信仰半分、意地半分」を口癖に立ち向かい解決したそうです。苦労も多かったと思いますが、全ては子ども達のために身を粉にして働かれていたと推察されます。この『全ては子ども達のために』、そして、先の澤田先生の学園創立の願いは、これからの受け継ぎ、大切にしたいことです。

私は、30年ほど学園に奉職していましたが、この30年間でも学園は大きく変わりました。当初は「エリザベス・サンダース・ホーム」の子ども達への教育が中心でしたが、学園の教育の姿勢や、教育環境に関心が寄せられて一般家庭からの入学希望者も増えてきました。現在は、一般家庭からの通学生が9割程です。どの子ども『神様から愛されている子ども』として、教職員は一人ひとりの良さを引き出し、使命感を持って子ども達に向き合っています。

また、教育施設環境も大きく変わりました。小川前学園長の学園総合発展計画によって、「海の見えるホール」の竣工に始まって、「森の中の教室」「小学校棟」「体育館棟」と次々に立派な施設が完成していきました。

施設だけでなく、防犯カメラ設置やPC、LAN整備、iPad等「GIGAスクール構想」に対応できるICT環境も整いました。

進化論で有名なダーウインの言葉の中に、
「強い者、賢い者が生き残るのではない。
変化できる者が生き残るのだ。」とあります。

これまで、聖ステパノ学園も長きに亘って積み重ねてきた伝統を守りつつ、新しい時代に求められる教育や、学校としての在り方を見つめ、充実させていかなければなりません。さらに『良い学校』となるよう、時代の変化に対応して、進化していく必要があります。

キリスト教の学校として、子ども達の様々な個性を包括的に育む『インクルーシブ教育』、多様なニーズに応えられる『オルタナティブ教育』、困難な状況、自信を喪失した心の回復を育む『レジリエンス教育』。この3つを学園の教育の柱として実践してきました。

文部科学省でも、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育のシステム構築を推進しています。今後、公立学校もインクルーシブ教育の導入・実践がされていくと思われれます。コロナ禍、異常気象、各地での戦争・紛争、新しい技術など、これまでと違った考え方や行動が求められる時代です。そのような中でしなやかに適応して上手く回復していく力、『レジリエンス力』が必要になってきます。

学園も、これからは『レジリエンス教育』に力を入れる必要性を感じています。時代の変化に対応しつつ、これからの時代を生きるために必要な力を育み、さらに『良い学校』『魅力ある学校』として歩み続けていきます。私も誠心誠意、努めていく所存です。

皆さんに会えて

前理事長・学園長 小川 正夫

皆さんこんにちは、久しぶりにお話ができ懐かしく嬉しい気がします。今回は創立七十年特集号ということですが、気が付くと私の教員生活も満六十五年を超えています。

私が新任の教諭だったころ、立教小学校と立教女学院小学校で学院のタッカー・ホールにステパノ学園の子ども達を招いて、チャリティーコンサートを行い私が司会したことを思い出します。光陰矢の如しですね。



私の曾孫は三歳になるのですが、宋左近さんという詩人が「あなたに会うために」の中に紹介されていた話を思い出しました。

ある三歳になる男の子が、母親に投げかけた言葉だったそうです。

「あのね、ママ、どうして僕が生まれてきたか知っているよ。僕ね、ママに逢うために生まれてきたんだよ。」

誰だって「私、あなたに逢うために生まれてきたの」と言われたら嬉しくなりませぬ。

詩人、宋さんは、神様が人をおつくりになったとき、きつと、こんな言葉が言える人成長してほしいとお考えになったのではないかと思うとも書いていました。

どんな人に出会うかは、その人の成長に大

きく影響を与えると思うのですが、殊に、母親から受ける影響は少なくないと思います。

教師も亦、子ども達に大きな影響を与え続ける仕事をしていきますが、早く学校に着いて「先生、あのね」と声をかけたくなるような先生を、子ども達や親達は求めているのです。少し時代感覚が古いのもかもしれませんが、教職員の毎朝のお祈りの中に「父親のように毅然とした姿勢で道を示し、母親のように温かく見守る包容力を持てるようにして下さい」という言葉があつたのを覚えていきます。

世界的に注目されていた盲目の天才ピアニスト、辻井伸行さんの演奏は素晴らしく、私達多くの人々に熱い感動を運んでくれますが今も心に残っている言葉があります。

記者のひとりが辻井さんに、こんな言葉を投げかけていました。「もし、神様が、貴方のどんな願いでも叶えてくれると言われたら、どんなことを、お願いしますか」と、聞いたことがありました。少し考えてはいましたが笑顔で嬉しそうに「できれば、お母さんの顔を見たいです」と答えていました。

聖書の授業で、こんなことがありました。

「神様はいつも私達の傍にいて下さるって言うけれど、世界中にいる人達の傍に居るのは無理ではないですか」という小学二年生に、先生は「なめるほど、そうだね。だから、神様は、代わりにお母さんに手伝ってもらって、君達の傍にいつもいて、お祈りをしてしていると

神様は傍にきて、どうしたらよいかを、そつと教えてくれるんだよ。見えないんだけどね」と応えていました。

みんな同じでなくともよいのですが、母親とはそういう人なのかもしれませんね。

ちょうど一年前に教職を去った私ですが、道で幼い子ども達に出会うと懐かしく、可愛いらしく思えて、どの子にも声をかけたくなりますが、こんな時代ですので控えています。

保育園の幼い子ども達が先生と一緒に散歩していた時、カートの中にいた園児が、私の顔を見て小さな手を振ってくれたり、夕方散歩しているとき、近くの小学校から帰ってくる数人の男の子達に出会いますと、そのなかのひとりが明るい声で「こんにちは」、別の男の子が、笑顔で「さようなら」と私に声をかけてくれたことがありました。ただそれだけのことですが、明るい気持ちになり嬉しくなつて、またあの子に会いたいと思います。

この七十年、今まで多くの方々が献身的に学園を支え温かい心で援助して下さいましたが、その方々お一人おひとりの微笑みが目に浮かび、いつまでも忘れることはありません。

悲しいことですが亡くなられた方々もありますが、私たちの心の中には、いまでも生き続けていて、出来れば、あの人に会いたい、あの人に、今の聖ステパノ学園の子ども達の姿を見てほしいと思ったりします。

「聖ステパノ学園につながる誇らしさ」

元中学校国語科教諭 西海 多恵子

創立七十周年。積み重ねられた日々と、その中の無数のドラマを想像します。一人ひとりの子どもがいて、その子を見守り、成長を助けようと力を尽くした周囲の人々の、七十年という時間を思います。

私自身は、一九九一年から三十年間、主に中学校教諭として勤務いたしました。長い間、この学園に関わることができたのは、人生の大きな喜びです。聖ステパノ学園とは、どのような場所か、そこでの時間が何であったのか、いま三つの視点から、考えています。

一つは「変わる」ということ。かつて勤務した、公立大規模校での経験で私が身に着けた教育観は、ステパノにきて大きく変わりました。ありのまま、全身で向かってきてくれる生徒たち。体裁や受け売りの考えや言葉、小手先のごまかしは、すべて見破られ、拒否され、役に立ちませんでした。幾度も自分の未熟さを思い知らされる中で、大切なのは、目の前のこの一人が、何を考え、何を求め、必要なのは何なのか、ということだとようやく気付いたのです。そしてその一人に、自分は何ができるのか、何をしなければならぬのか。これがステパノでの私の出発点です。生徒たちも変わります。中学一年生の時のケンカ相手も、三年間かけて理解し、認め合

えるようになる。外部の小学校での辛い経験を仲間の前で話し、「今はもう、前のことは気にしないでいられるようになりました。」と笑顔を見せてくれた生徒。変わっていく子どもたちの姿を見て、印象的な言葉を保護者の方からも頂きました。「勉強、成績が何より気になっていただけ、それより大切なことがあるんですね。」大人も変わります。

次に「創る」ということ。ステパノ中学校では、多くの教科で一人の教員が教科を担当します。その教員の工夫次第で、学習へのアプローチが様々に展開できたのも、ありがたいことでした。一人ひとりに合わせて、力の伸長の図れる、能動的な、しかも楽しい学習とは？外部の研修会への参加を事務部が積極的に支援してくれ、学内でも、教科を超えて教員同士アイデアを交換して、新しい試みをいくつも行うことができました。

その中でも、中学生全員による創作劇の活動は、とても楽しい時間でした。誰しもが、自分を表現したい気持ち、潜在的に持っていると思います。人前は苦手です、とうつぶわっていた生徒も、次第に顔を上げ、目が変わってきます。裏方のスタッフも、照明の当てる方や大道具の出し入れの分担など、上級生を中心に積極的に考え出します。一つの目標に向かって、他学年の生徒とも協力し合い、劇を創り上げた彼らの顔は輝いています。さらに、一つの創造の経験で得た自信や積極性は別の機会にも必ずつながることを、生徒たち

は様々な場で実証してくれました。

そして「広がる」。学園で働かせて頂く中で、思いもかけないつながりを得、経験することでもできました。イエス様につながる葡萄の枝の一つに加えられたのは、最も大きなことです。また、キリスト教学校教育同盟の研修等を通じて、何人もの先生方から忘れ難い教えを頂きました。海の見えるホールでは、いくつもの素晴らしい演奏や、講演に感動しました。卒業した生徒たちはそれぞれの道を進み、どの一人も、一生懸命生きています。その彼らとのつながりを嬉しく思います。一緒に働き、嬉しいことも困ったことも、共に語り、励まし、助け合ってきた同僚に、深く感謝します。

聖ステパノ学園は、七十年の歴史の中で、その時に応じて、ある部分変わり続ける存在であったと思います。私がいた三十年の間にも、常に、より良き方向を目指して変わってきました。しかし、この三年余、今まで大事にしてきた、教育的な柱ともいえるべき、「触れ合い」が、今までと同じ形ではできず、変わらざるを得ない状況となりました。その中でも、形を変え、工夫の中に、新しい「ステパノらしさ」を、教職員が創り出そうとしていることを感じます。そして、子どもたちは、必ずそれに応えようとします。子どもも持つ力を信じます。時間を超えて、さらに世界中に、「聖ステパノ学園につながる誇らしさ」が広がっていきますように。創立七十周年おめでとうございます。

事務長 佐藤 雅美

創立七十周年迎えて

小学校教頭 長谷川 誠子

創立七〇周年に寄せて

中学校教頭 田中 圭史

聖ステパノ学園が1953年(昭和28年)に創立されてから、七十年が経ちました。たくさんの方々に支えていただきながら経てきた七十年であることに深く感謝いたします。

聖ステパノ学園内には、豊かな自然に囲まれ、背の高い樹木がたくさんあります。中でもグラウンドに上げる1本のクスノキはたぶんいちばん古いクスノキで聖ステパノ学園の歴史を象徴する大樹になります。休み時間になると子どもたちがクスノキの下で遊んでいます。その姿をみると、まるでクスノキが子どもたちを温かく見守ってくれているようです。グラウンドだけが少ないのは、見守ってくれているクスノキのお陰なのかもしれません。きつと子どもたちに強く、やさしく育ってほしいという願いで植えられたのではないかと思います。また体育館棟を建替えるときに旧職員室前にあった聖ステパノ学園を始めた記念の四角い石を体育館棟、小学校棟をつなぐ場所に移し、いつも子どもたちを見守ってくれているような気がしています。

聖ステパノ学園の歴史が生き続けています。

ステパノ今昔

グラウンドのクスノキ



創立当初から緑豊かな学園の環境は、七十年経った今でもたくさんの方々が、子ども達を見守り癒してくれています。木々の色づき、生き物の様子などから季節を感じることでできる環境は子ども達にとって素晴らしいものです。

創立者澤田美喜先生は子ども達一人ひとりにより良い教育を願い、祈りをもってこの働きを始められました。その思いは先人の先生方に引き継がれ、現在の教職員もその思いを大切に子ども達と向き合っています。

聖ステパノ学園は子ども達が自分らしく生活できる場であり、仲間と共に成長できる場であると感じます。様々な活動の共有や少数での濃い関わりが、一人ひとりに変化をもたらし、良き成長へ導いています。一年後、二年後：と子ども達は確実に成長していきまします。私達教職員は現状だけにとらわれず、成長を信じて粘り強く関わっています。

「〇〇さん、変わってきたね。成長したね。」という、先生方の話をよく耳にします。子ども達の周りには先生方の優しい眼差しがあります。一人ひとりが持っている可能性を大切に、引き出していくという働きをこれからもみんな協力して進めていきたいと思っています。

本学園創立七〇周年という節目に立ち会うことを感謝するとともに、大きな責任を感じています。創立者・澤田美喜先生は、第二次世界大戦後の混乱期に見捨てられた子どもたちへ大きな深い愛をもって行動されました。私はその尊いはたらきを伝え聞くことしかできませんが、創立記念日を迎えるとき、気持ちを新たに過ごさせていただいています。

子どもたちに必要な教育をし、自立への道を備えていくこと、そして彼らが将来を拓く力をつけること。それは創立当時も今も変わりません。これらの軸となる聖書の教えが『愛と聖』です。この二つが調和しているところに子どもたちが成長していくと信じています。

また生活に密着した関わりができるのは少人数だからこそだと思います。ステパノに来て、ものも時間も十分になくても感謝して大切に使うこと、日々の生活の営みを疎かにしないことを教えられました。ステパノの子どもたちは他者との違いを認めると同時に、必要なことはできるようになるまで待つ心の強さを養っています。

澤田美喜先生から始まり、多くの方々が受け継いできたバトンをしっかりと握っていきたいと思います。諸先輩方の子どもたちに注いだ愛情と、彼らの自立に対する使命感をおぼえ、これからも励んでまいります。

小学校教務副主任 赤田 祐章

晴れた月曜日の朝、グラウンドで小学校・中学校の合同礼拝が行われます。聖ステパノ学園の週の始まりです。

七月、岩崎山の斜面に新しい十字架が設置されました。山に向かって聖歌を歌う屋外での礼拝は、極端な暑さ寒さに耐える時もありますが、かつて高槻の地にもあったセミナリオを彷彿させ、とても気持ちが良いものです。聖ステパノ学園では、一日の中でたくさん祈ります。祈ることにより、神さまがいつもそばにいてくださることを感じます。人の力がいかに小さいかを知り、驕り高ぶることを抑えてくれます。謙虚な心を持ち、他人に接することができるようになります。

また、これからの生活では、外国の方と交流することが多くなります。互いを理解するためには、どのような考え方をしているのかを知らなければなりません。外国の方の思考の土台はキリスト教であることが多く、キリスト教を学ぶことは、他国の人を理解する助けになります。

タイトル『キリエ・エレインソン』は、「主よ、憐れみをお与えください」という意味を持つ最も短いお祈りです。いつでも唱えることができます。これからも子どもたちに、謙虚に人と交わることを伝えていきたいです。

教諭 飯田 裕美

まず、自然豊かであり、心がほっとする学び舎であること。そして、そこに通うステパノっ子たちは、純粋で素直で優しく、笑顔がとびきり素敵なこと。そのステパノっ子たちと懸命に向き合い、深い愛情で接し、そして何よりステパノっ子たちが大好きな教職員に囲まれていること。また、行事がたくさんあり、子どもたちはその行事一つも手を抜かず、懸命に向き合う。そして先輩達は後輩達のために多くのものを残し、教職員も子どもたち同様に行事に取り組み、学校が丸となって同じ目標に突き進む、そして多くの達成感を共に味わえる素晴らしい時間が多くある、ということが私の思うステパノ学園です。

70周年を迎え、これからのステパノっ子たちには、今ある優しさ、素直さに加え、更なる強さを身に着けてほしいと願っています。これからの時代を乗り越えるために、周囲の人との協力の中、正しい選択ができること、そして自分の力で生きていく力を身に付けてほしい。そんな強さを抱きながら、卒業後もステパノっ子として、80周年、100周年を迎えてほしいと思っています。そしてこれからも、いつでもどんな時でも訪れることができ場所であり続けて欲しいと願っています。

教諭 石川 瑠一

自分は中学生の頃、「なんでもできる」と思っていました。地元の小さな中学校の中では勉強もできたし、足もそこそこ速い方でした。要するに天狗になっていたと言えます。そんな私も年を重ねるにつれ、世界の広さや周りのすばらしさに気づいていくわけですが、ステパノの子たちはもう既にそこに気づいているように見えます。そこには『人を認める素直さ』が根底にあるのだと思います。

国語の授業のとき、こんな様子が見られました。国語の問いには答えが一つしかないものより、そうでないものの方が多いのでこちらとしても様々な意見を期待して発問をします。その中で一人の子しか気づけなかった考え方が出たとき、クラスの反応は「なるほど」「そういうことか」「すごいね」など肯定的な意見で満ち溢れていました。当たり前のことかもしれませんが、自分になかった思考を素直に受け止められるということは昔の自分にはできなかったかも知れない、すごいなあと思しながら授業をしています。

その素敵な力を今後の人生に活かせるように成長させるのも私の役割だと思っています。使い方をしっかり覚えれば社会に出てからも強力な武器です。ステパノ学園が皆の素直さの支えになることを願っています。

創立七十周年に寄せて

スクールカウンセラー 井島 素子

七十年の歴史をお喜び申し上げます。

私達の日々は祈りと共に始まります。

「始業の祈り」

全能の神さま、新しい心で勉強を始めるわたしたちに御恵みをお与えください。どうぞ熱心に学び、神さまと大ぜいの人々のために働く良いそなえをさせてください。主イエスキリストによってお願いいたします。アーメン

そして活動が終わる時にも祈ります。

「終業の祈り」

天の父なる神さま、きょうの勉強を終えることができましたお恵みを感じたいします。どうぞわたしたちが学びましたことをよく覚えて、これを行い、ますます主に従う良い子どもになることができますよう、この感謝と願いを主イエスキリストによってお願いいたします。アーメン

礼拝式文から、私が「ステパノ学園らしき」を感じ、また大切だと考えるお祈りを書かせていただきました。



子ども達が教えてくれること

小学校教務主任 上戸 基夫

どんなにきれいな言葉を並べても、どんなに正しい言葉を並べても、自分の気持ちや自分の考えに少しでも曇りがあると、本当の心を見せてくれません。そんな時は、わかつたふりや、不満いっぱい行動しか見せてくれません。どんなに良い顔を見せ、うわべだけの言葉を口にしても、そこに、自分の本当の心と思いがなければ、それを見抜く鋭い目とまっすぐな心を持っている。それがこの学園の子ども達だと思えます。毎日の学園生活で、私に本気で向き合う事と正直でいる事の大切さを教えてくれます。

聖ステパノ学園に奉職して、約20年。多くの児童生徒が個性を輝かせながら学園で学び、巣立って行きました。数多くの卒業生が、学園70年の歩みを一つひとつ作ってきたと思うと、改めて襟を正さずにはいられません。そんな学園で私は何より教師の「品」と「器」の大切さを子ども達から学ぶことができました。

これから90周年、そして100周年に向け、学園が果たす役割はどんどん変わっていきます。100周年を迎えた時、その時の子ども達に「あの頃に頑張ってくれたから今があるね。」と言ってもらえるような歩みをこれからも果たしていきたいと思えます。

自分が思うステパノ学園らしき

庶務 小出 初美

こちらの学園に来てから、まだ日は浅い方ですが、私が思うステパノ学園らしきについて書かせていただきます。

大磯の自然に囲まれ、春に学校の桜も綺麗に咲き、お花の植え替えをしたり、環境のすばらしい場所にあります。

笑顔で、いつも元気いっぱい、心優しく進んで挨拶をしてくれるステパノ学園の子ども達です。

また、学園行事も大変多く、他学年のとの交流がとて深いです。

そんな子ども達を教職員の皆様と共に連携し、取り組んでいる姿がとてすばらしく印象的です。

私自身、子ども達の進級・卒業の節目に携わりながら、仕事をがんばっていききたいと思えます。



小学校教室



神様を中心にした、家族みたいな学校

教諭 根田 栄子

聖ステパノ学園らしさ

教務副主任 咲間 直人

ステパノらしさ

非常勤講師 笹尾 和子

小さな学校だからでしょうか、子ども同士先生同士・子どもと先生の距離がとても近いです。『先生方も、神様の子どもです』と言っているからか、『先生も子どもも神様の前では兄弟』的な感覚があるからでしょうか。近過ぎて争いになることもありませんが、基本は家族なので仲が良いです。言い方に問題があったり、言葉を知らなくて、行き違いになる事もあるけれど、優しい人ばかりなので、結局は相手を思っている言葉だったんだ…とわかることが多いです。

家族の関係は卒業しても続きます。行事や節目の礼拝、また何でもない時：卒業生（時にはその保護者も）がやって来ます。大きな行事の時にはまるで同窓会のように、高校生、大学生、更には社会人：各学年の卒業生が集まり、見て楽しむだけでなく、在校生とお話してくれたり、片付けを手伝ってくれたり!! と、交流は続きます。最近の卒業生だけではなく、一期生、二期生からの初期の卒業生の皆さんも毎年母の日に集まり、創設者澤田美喜先生を記念する礼拝を続けておられます。思えば、エリザベス・サンダース・ホームで兄弟のように育つ子ども達を教育していた頃からの雰囲気、今に繋がっているのかもしれない。

私が聖ステパノ学園に奉職した初年度に先輩の先生方が子ども達のことを見て「うちの子達はみんなステパノっ子だから」と笑顔で言っていたのが今でも印象深く心に残っています。褒める時も、楽しむ時も、叱る時も、悲しい時も、上辺だけでなく家族のように心から子ども達と向き合い、教職員と保護者の方々と両輪で子ども達を育てているという思いがあるからこそ言える言葉です。子ども達を自然と「ステパノっ子」と言える精神と環境が聖ステパノ学園らしさだと思います。だからこそ、卒業してからも足しげく顔を見せ、近況を話してくれる子や「またこの学校に通いたい」と言ってくれる子もいます。そう思ってもらえることはとても幸せです。

「喜ぶ人と共に喜び、

泣く人と共に泣きなさい。」

ローマの信徒への手紙 第12章15節

子ども達は成功もすれば失敗もします。その経験を受け止め、皆で育てるのが学校です。聖ステパノ学園はこの聖句のように、どんな時も教職員が家族のようにステパノっ子である子ども達と真剣に向き合い、保護者の方と共に将来を考えていく、そんな場所です。

私がステパノらしいと思うことは「私たちには神さまがいてくださっている」と感じる瞬間がいっぱいあることです。神さまと出会う、お友達と出会う、感謝です。うれしい事も悲しい事も次々やってきます。うれしいときは「神さま、ありがとうございます」「イエス様すてき～」という言葉が出てきます。悲しいとき「神さま助けて、つらいなー、もうムリ!」と叫びたい気持ちになります。困難に思う事があっても少し角度を変えて考え、振り返ってみると「なんだか以前に読んで聖書を思い出せる場面だな」「神さまが計画していたのかも…」と感じて自分を見つめ直したりこれからの目標を知るきっかけになります。

※野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。▼マタイ福音書 第6章28節

「君と行くよってだれか僕に言ってくれたらホラその気になる」と歌う讚美歌のとおりです。そつと笑顔で背中を押してくれるような気がして（少し休憩したら）もう一度やってみてもいいかも、という気持ちになります。

安心して笑顔になれる仲間に出会って勇氣をもらえる場所がステパノ学園です。

まるでスローモーションのよう。私が初めてここステパノ学園に足を踏み入れた時の思いです。校舎を彩る子ども達の笑い声、高い空、広がる雲、小動物たちの鳴き声：すべてが、大磯の潮風に包まれてゆったりとした時間を流している感じがしたことを、今でも鮮明に覚えています。

ステパノに通う子どもたちは、いつもまっすぐで曇りなき眼差しで主を仰ぎ、純粋な信仰をもって祈りを捧げています。そのような子ども達の集まりの真ん中には、必ず聖霊様が訪れてくださるのです。それはまさに「主の宮」と言えるでしょう。

♪主だけをおもい 主と愛し合う
主と共に住む ここは主の宮♪

（『主の宮』作詞作曲：山川高平）
ステパノには素敵なホール、由緒あるチャペルがありますが、子ども達の集うこのステパノ全体が、私には主を礼拝する場所に思えてならないのです。

創立七十周年を迎え、神様の大きいなる祝福を受けてさらに恵みに満ちた学校となることを信じて祈りつつ、学園も、児童生徒も、私達教職員も、ただ主に栄光をお返しするため、ただひたすらに成長し、歩んでいきたいと思えます。

私が聖ステパノ学園に奉職してからずっと関わらせていただいているハンドベル部が、七十周年を記念する創立記念礼拝で演奏することになりました。今年は部員が少なめで、中学生の部員4名と教員2名で、上戸先生の指揮の下6名で演奏を行います。ハンドベルでは、一人一人が違う音が鳴るベルをもって演奏するので、タイミングを掴むことなど難しい面もあります。ですが、練習してうまく奏でられた時の達成感はひとしおです。

ハンドベル部で練習を見ていると、ステパノ学園らしさを感じる場面が多々あります。部活を始める前の準備の時の部員達の元気な挨拶が始まり、普段の学校生活の中での様子とは人が変わったような演奏中の集中力や、片付けの際に皆で声掛けをしながら協力している様子などなど。年度ごとにメンバーで演奏の色などは変わっていても、聖ステパノ学園で普段から大切にしていることは、部活動の場でも変わらないことを感じています。今年のメンバーでは一体どのような演奏をしていくことになるのでしょうか。夏休みの間、少ない人数でもテキパキと準備して練習に励みました。今年は、外部での演奏や説明会など、ハンドベル部の演奏の機会が多いので楽しみです。

創立70周年を迎える聖ステパノ学園。70年間で、さまざまな変化があったと思います。現在のステパノ学園は、世界のどこを探しても、似たような学校はないだろうと私は日々感じています。

では、どのあたりが他にはない学校と感じるのか、私なりに少し紹介します。

まずは、子ども達の輝きの強さです。ステパノ学園は、子ども達の個性を尊重し、大切にしていることで、一人ひとりの個性が特に輝いていると感じます。興味のあることや好きな分野などが引き出され、学年が上がるたびに伸びているなど思わせてくれる子ども達ばかりです。そして私達教職員は子ども達を見て、この子はこんな個性を持った子だとすぐに分かるくらい把握しているところもまた、誇れる部分ではないかと思えます。

次に、教職員の子ども達に対する熱意や愛情深さです。子ども達を第一に考え、何が子ども達のためになるのか、日々教育にあたっては教職員がとても多いと感じます。そのような姿を見て私自身も刺激を受け、日々成長させていただいています。

これからのステパノ学園もよりよいものとなるように、引き続き努力していきたいと思えます。

感謝

総務 新庄 主来

澤田美喜先生が創立された聖ステパノ学園に卒業後も職員として関わりをもたせて頂いている恵みを覚えます。クリスチャン人口が数少ない日本の中で毎朝、必ず礼拝をお捧げする学校に導かれたことを主に感謝いたします。

聖書に、「あなたのみことばは、私の足のもしび、私の道の光です。」と記されていますが、小学生、中学生の頃からみことばの種が心に蒔かれていると、将来、大人になった時に人生の目的をはっきりと見出すことができます。なぜなら、みことばは決して揺るぐことのない真理のことばだからです。聖書はまた、「彼(主)に信頼する者は、失望させられることがない。」と語ります。学園の子どもたちを見ているとみことばの種が確実に実を結んでいることを覚えます。困っている友がいれば手を差し伸べ、喜んでいる友と一緒に喜べる、これはまさに、聖書が語る平和をつくるもの(神の子)の姿です。

澤田美喜先生が祈りにより創立された学園で学ぶことのできる児童生徒の幸いを改めて覚えます。そして、私自身その学園の卒業生であることを、心から誇りに思います。

創立七十周年おめでとうございます。

聖ステパノ学園らしさと願い

教諭 高橋 謙二

聖ステパノ学園での生活の中で、私がステパノを思うに、子ども・保護者・教職員の三者が共に成長できる唯一の学校であると自負しています。基本的に学校は子どもが成長する場と考えている方が多いと思われませんが、ステパノは子どもたちの成長は勿論ではありますが、それだけではなく、子どもたちと学校生活を送る中で、教職員・保護者の方が自身を見つめ直し、私たち大人も成長できる居場所ともなっています。特に教職員は、子どもたちや保護者の方に対して、寄り添い正面から向き合うことにより子どもたちの純粹で素直な言動、そして保護者の方の子どもを思いやる真剣さから学ぶことが多く、成長させて頂けるのがステパノらしい学校としての強さだと感じています。

多様な個性・特性・能力をもつクラス20名定員の授業や行事などから、子どもたちは他者を自然にあたり前のように受け入れ、お互いを尊重し、違う価値観を認め合い、日々楽しんで生きていく人間力を身につけています。そのために、私たち教職員は特別扱いをせず、そして支援や配慮をしすぎない、どの子ども同じ場で同じ活動をさせることから、他の普通学校・支援学校にはない成長が育むことができればと願っています。

ステパノ学園の「なにか」

教諭 露崎 志苑

ステパノ学園に赴任して、2年目となりました。以前は他の学校で、また、企業で働いた経験があるためか、赴任して早々、「ステパノらしさ」というものをありありと実感しました。それは、子どもたちの「素直さ」です。

ステパノ学園の生徒たちには行事や授業での活動などの様々なことに対してまっすぐに向かっていく姿勢があります。ステパノにいと、楽しいことは思いっきり楽しみ、やるべきことにはまっすぐに進んでいこうとする姿勢に日々出会います。そして、そのような素直さから生まれる生徒たちの一体感や躍動感にいつも心が動かされます。

何がステパノらしさを生むのか。豊かな自然なのか、行事なのか、建学の精神なのか。何が「らしさ」をつくりだしているのかは考えてみてもよく分かりません。ただ、創立から連続と引き継がれてきた「なにか」があるということは確かです。ステパノ学園をつくるっていく一員としてこの「なにか」という襷をしっかりと繋いでいくことができれば嬉しいです。

ステパノ今昔

フレンドシップ



初めて子どもたちと出会った時のことです。学園の中を一人で歩く私を見て、「あの人は誰だろう？」そんな疑問もあつたと思いますが、どの子からも口々に「おはようございます」の言葉が聞こえてきました。それまで勤務していた大規模校では見られない光景でした。

ですが、子どもたちにとってはまだ何者でもない私に向けられた挨拶に、見ず知らずの人を受け入れようとする子どもたちの素直さを感じてとても嬉しく、その後の挨拶では「こんなに挨拶ができる学校は初めてです」と伝えました。

学年を越えた縦割り活動や日常の様子を見ても、子ども達は人との間に垣根を作らずに対等に接し、学び合っています。中学生になると、不思議と「先輩」「後輩」といった関係性が見られるようになり、それは社会に出るにふさわしい様子となっていきますが、小学生の頃の「他者を受け入れる姿勢」は健在です。

こうした子どもたちの姿と環境が聖ステパノ学園らしきであると感じます。温かな環境の中で、子どもたちが受け入れられていることを感じることができるよう、私も振る舞いたいと思います。

私は、ステパノ学園が大好きです。何故なら、いろんな子供が居るからです。毎日楽しく過ごしています。子供から学ぶこともあるし、今の自分が良く分かります。大人になると、子供の頃の素直さを忘れ、恥ずかしいとか照れなどから現実逃避をしてしまいます。でも逃げるなら今からとことん逃げたい。我慢も時には必要ですが自分の心が壊れるくらいなら逃げたい。必ず光が見える。人の悪口を言う人にはならないで欲しいし、好き嫌いで人を判断もしないで欲しい。自分が嫌いでも他の人が好きなんだから、考え方や自分と違うだけで嫌いの判断はしないで素直に真つすぐ生きていけば必ず誰かが見ている。

この学園は誰にでも手を差し伸べる場であり、また、私自身も困っている人の味方でありたいと思います。学力は必要ですが、それよりも学校が楽しいと子供たちが思っただけで毎日登校してもらいたいです。学校は学校でも楽校（楽しい）でもいいと思います。ステパノ学園の歴史を今一度思い返し、先人の方々の思いを汲んで、どうあるべきかを考えて今後に繋げて行きたいと思えます。私だけでは、力が足りません。なので皆様の力を合わせて、共にステパノ学園の歴史を作りたいと思いません。宜しくお願い致します。

初夏のある雨の日、七曲を下っていると、前方に高学年と思われる男子のグループが歩いていました。すぐに追いつき、後ろを歩いていると、その中の一人が、「どうぞ先に行つて下さい。」と、言いました。「いいのよ。急いでいいから。」と、答えると、「いいえ。この子は下り坂が苦手なんです。だから先に行つて下さい。」と、言いながら隣の子を指さしました。「じゃあ先に行かせてもらおうね。ありがとう。」と、彼らを追い抜き、歩き始めました。すると、背後からさっきの男子の子が、「でもね、この子、下り坂を降りるのが、上手になつたんですよ。がんばったんです。」と、教えてくれました。振り返ると、ゆっくり一歩ずつ慎重に下りて来る男の子と、周りで見守りながら、歩調を合わせてゆっくり下りて来る数人の男の子達がいました。その姿を見て、ほっこりした気持ちになりました。

また、ある朝、たくさんの教科書や参考書を入れた大きなバックを持って七曲を上っていると、後ろから来た中学生が、「先生、お持ちしましょうか。」と、声をかけてくれました。思いがけない言葉に本当にびっくりしました。ステパノの子どもたちの優しさに触れ、あらためて出会いに感謝した、二つの出来事でした。

私がこの学校で奉職させていただくことになったのは9月の事でした。先生方との顔会わせをしてすぐにステパノまつりの準備が始まり、これが私にとって初めての生徒との関りでした。「ステパノまつりとはどんな様子なのだろう?」、「(自分の担当となった)射的の生徒はどんな子かな?」などと私自身は不安を感じながら活動していました。一方で、生徒は色々な意見を出しとてもいきいきと活動していて、まつり当日も盛況のうちに終える事が出来ました。この経験で私は聖ステパノ学園では行事を大切にしているのだということと学び、その中で生徒の成長を身近で感じる事が出来た最初の思い出となりました。

今年度は、野外炊事などコロナ以前のようない行事を行うことが出来ています。そして、生徒の皆さんはとても楽しく参加してくれている様です。行事は、生徒が様々な活動にチャレンジし豊かな学びを得る場となっています。もちろん、教室での机に向かう学習も大切ですが、実体験を通して得た知識・知恵は生徒にとってかけがえのないものになります。私はこれからも「やってごらん。」と生徒に豊かな学びをしていってほしいと思います。

創立70周年おめでとうございます。奉職一年足らずの私が感じる学園らしさです。

大磯駅の改札口を出ると行き交う人や街の空気はのんびりとした中にもどこことなく品の良さを感じます。信号のない駅前の横断歩道を渡るとすぐに聖ステパノ学園の校門です。左に澤田美喜記念館、長いトンネルの向こうにエリザベス・サンダース・ホーム、山の上が中学校です。山に登らず進んでいくと平屋作りの小学校があります。学年一クラスの小学校は木のぬくもりがする素敵な校舎で子どもたちの元気な声も毎日聞こえてきます。神様の教えを基にお互いを認め合い、やさしい心と素直な気持ちで日々子どもたちが勉強しているのがステパノらしさです。

ステパノ学園にしかないものは豊かな自然環境と先生と子どもたちの温かさです。春は草花、夏はセミの声。秋にはたくさん落ち葉、冬の海もホールから見るとすてきです。

四季の移り変わりと共に日々成長していく子どもたちを間近で見ることが出来ることを神様に感謝しています。これからもステパノ学園の歴史を作っていく子どもたちに期待をしながら、私自身も一日一日を大切に、誠意を持って過ごしていきたいと思えます

ステパノでは多くの行事があります。そして、それぞれの行事で一人ひとりの役割があり、行事を通して子どもたちが成長していく姿が見られるのはステパノらしい一面だと思います。ステパノは全員で協力し、行事を作っていくため、一人ひとりの働きがとても重要になってきます。時には一人欠けただけでも成り立たなくなってしまうことがあるくらい、プレッシャーも大きく重要な役割もあります。小さな学校であるステパノだからこそ一人ひとりの役割についてやりがいを感じながら取り組むことができます。そして行事が終わった後には自分が頑張れば頑張った分の充実感や達成感を味わうことができ、一人ひとりの成長、そして自信に繋がっていきます。

新型コロナウイルスの影響で行事ができた日々を知っている今の中学生は行事が楽しみと言っている子どもも多く、行事が出来る喜びを感じています。2学期以降もたくさん行事が予定されています。子どもたちが全力で行事に取り組み、楽しみ、力をつけていくステパノらしさを今後も大切にしていきたいです。



私の思うステパノらしさ

非常勤講師 能條 貴大

ステパノ学園が創立70周年を迎えます。人間で言えば古希になる節目の年です。古希とは、中国・唐の詩人である杜甫の詩の一節「人生七十古来稀なり」という言葉に由来しています。昔は70歳まで生きることが稀であったことから、その月日を祝う言葉として生まれました。

70年という長い年を掛けて現在のステパノ学園が形作られたと思うと、非常に感慨深いです。

ステパノ学園では、学業に励むことだけにとどまらずに、子どもたちが学年の壁を超えて、楽しく生き生きとした学園生活を送ることができます。そこで生まれる個性豊かな思考や人間関係が、それぞれ一人一人の「自分らしさ」を育みます。また、そのような環境こそが「ステパノらしさ」を存分に表していると思います。豊かな未来へ道を切り開ける人となるよう、お手伝いさせていただきま

ステパノ今昔

体育館



「寛容」であること

教諭 林 健太郎

私がステパノ学園に初めて来たのは、夏休み中のある日のことでした。駅前であるにも関わらず、自然が豊かなことに驚きました。のどかな、こんなところで教師をやつてみたいなど思つたのをよく覚えています。

さて、「ステパノらしさ」について考えた時に、私が真っ先に浮かぶのは「寛容」であるということです。ステパノの子ども達は、本当に様々な個性を持っています。その中には、画一的にいかないことが多々あります。「みんながつてみんないい」と、金子みすゞは言っています。多様性の時代において素敵な言葉ですが、正直私は、そう言われても、と思つてしまうこともあります。

しかし、それぞれが人の違いを認めて、「寛容」であることは大切だと思います。ステパノ学園で勤め始めて、先生達も、子ども達同士も「寛容」だと感じています。

海と山に囲まれた環境が、ステパノらしさである「寛容」さに大きな影響を与えていると思います。「寛容」なことがステパノらしさであり、それこそが「肝要」であるとも私は思っています。

これからも、ステパノらしさ「寛容」であることを大切にして精進していきたいと思つています。

ステパノで学ぶ

学校図書館司書 平野 朋子

学校図書館は、体育館棟の二階にあります。窓を全開にして耳をすますと、かすかにアオバトの鳴き声が聞こえてきます。アオバトというのは、海水を飲む珍しい鳥で、大磯のこゆるぎの浜に海水を飲みにやつてきて、ステパノの裏にある岩崎山で体を休ませます。中学校は小学校校舎から坂を上ったところにあるので、より大きくその声を聞くことができますが、山で姿を見たことはありません。

十年以上前になりますが、夏休みに小学生が大磯照ヶ崎海岸でアオバト観察会に参加するから一緒に行きませんか？と誘っていたとき、海上に飛来して海水を飲むアオバトを見たことがあります。黄緑色が美しかったです。

聖ステパノ学園に一歩足を踏み入れると、大きな木々の枝が伸びて葉が茂り、気持ち良く深呼吸したくなります。自然に包まれて安心できます。海と山に囲まれたこの環境の中で、子ども達は毎日怒ったり泣いたり笑ったり、全力で学び、遊び、成長しています。先生方も真正面から子どもに向き合い、共に成長できる喜びを感じています。

聖ステパノ学園の日々を支えてくださっているたくさんの方々へ感謝して、今日も私にできることを行つていきたいと思つています。

本校へ奉仕させていただいて半年、様々な気づきがあるなかで、強くおどろいたことのひとつが、「卒業生の来校の多さ」でした。出産の報告をしに来る方、地方から来る方、「なんとなく来た」という方。いままで公立の小学校に勤めていた私には驚きと、また、教師として羨望の光景でした。先生方もそうした卒業生との時間をとても大切にしていらっしゃる、どんな時でも、いつも温かく迎えている姿に感銘を受けました。

今回、この記事を書かせていただくにあたり、過去のステパノだよりの数年間分を拝見させていただきました。そうするとこれまで、非常に多くの個性豊かな先生方が、多種多様な子ども達の成長を考えながら学校を築いてこられたのだということを実感しました。こうした先生方がひとりひとりの子ども達のために尽くしてこられたことが「ステパノらしさ」であり、だからこそいつも多くの卒業生が訪ねてこられる『ふるさと』のようになっていると感じました。

今後も学園でご奉仕させていただくにあたり、私も児童生徒のふるさとになれるよう努力していきたいと思えます。常に目の前のひとりひとりの子どもたちの成長に集中して。

創立七十周年おめでとうございます。ここまで歩み続けるために言葉では伝えきれない程の様々な努力と歴史を感じます。

私が初めてステパノに来た時の第一印象は、「自然に囲まれた素敵な学校だなあ」と思いました。敷地内に山があつて中学から降りてくる途中では、晴れていれば富士山が見えていい景色。自然と深呼吸(笑)気分も上向きです。

そんな恵まれた環境の中で、ステパノっ子は本当に元氣いっぱい。ステパノならではの様々な経験を沢山することが出来ます。中でも、音楽会やクリスマス祝会はキリスト教学校ならではの素敵な発表会です。

きちんと意味も理解しながら、心も体も成長していく。そんな学校生活を過ごせるなんて本当にうらやましく思います。小学校一年生で入学し、中学三年生が卒業するまでの九年間は、皆の成長をとても感じます。

先生方も、子供たちを第一に考えて愛情たっぷりで見守って下さいます。本当に一生懸命です。

どんな事にもはじめの一步、前に踏み出す勇氣と、人を思いやる心を大切に、これからも共に成長していきたいと思えます。微力ではありますが、お力添え出来ますように。

私はステパノ学園に来てまだ約4カ月ほどです。まず、この学園に始めて訪れた際に驚いたことは、しっかりとした挨拶をする生徒たちです。すれ違つたと元気に「こんにちは！」と挨拶をしてくれたり、芸術棟に入ってくる時には「失礼いたします！」と挨拶をしてくれます。子どもの中には恥ずかしがつて挨拶の声が小さくなつてしまつたり、緊張して挨拶が出来ない子もいると思えます。しかし、ステパノ学園の生徒はハキハキと挨拶をしてくれる生徒が多いと感じました。元氣な挨拶は大人になつてからも大切なことなので、それが出来るこの学園の生徒達は素晴らしいと思えました。他には積極的な生徒が多いと思えます。授業でこの答えは何かと聞くと、手を挙げる生徒がとても多いです。そして、授業中に教室内を回っていると積極的に質問をしてくれます。そういった学ぶ姿勢もとても素晴らしいと思えました。

私は、ステパノ学園の生徒達の目がとてもさらさらとして感じています。

沢山の自然に囲まれて、少人数でいろいろな学年の生徒がかかわり合い、のびのびと学んでいるからこそ得られるものがあるのだと思えます。

創立七〇周年にあたって

教諭 松村 はるか

聖ステパノ学園創立七〇周年おめでとうございませう。

聖ステパノ学園は、澤田美喜先生が創設されたその歴史や背景を考えますと、イエスマがもつとも望まれた学校であると感じます。戦後の混乱期、どれほどの子どもたちが、この学園の働きによって救われたことでしょうか。その歴史を思うとき、私の耳に聞こえるイエス様の声があります。「私の兄弟(姉妹)であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。(マタイによる福音書)」

そして、当時、澤田美喜先生のもとに育った子どもたちが、戦後の社会を支えてくださったことは言うまでもありません。

聖ステパノ学園の七十年の歴史を考えますと、そこには神さまに導かれた子どもたちの存在があります。子どもたち一人ひとりが、今もなお、神さまの祝福を感じる事ができるよう、願ってやみません。

聖ステパノ学園の教職員の一人として、私たち自身が「いと小さき者」として豊かなお恵みのうちに生かされていることを忘れず、今日この日、この喜びの時を皆様と分かち合うことができますお恵みに、心より感謝を申し上げます。

ステパノ学園らしさ

非常勤講師 山澄 智英

創立70周年おめでとうございます。

昨年、ステパノ学園での最初の授業に向かっているときに、低学年の子が笑顔で、「おはようございます。何の先生ですか。」と声をかけてくれたことが思い出されます。

明るい挨拶、仲のよさが伝わるほのぼのしたやりとり、友達の発言への高い関心、夢中で筆を動かす姿、級友への寛容な言動などが授業や休み時間に見られました。掃除に励む姿も心に残っています。私にとって特に印象深いもの、それは中学校の給食当番さんが食器や食缶などを配膳室に片付けに来るときの表情です。黙々、淡々、笑顔・・・ある人は早足に下り、楽しそうに言葉を交わしながら颯爽と下ってくる人たちもいました。ステパノ学園でしか見られない光景でしょう。

自分たちにとってはごくあたりまえの日常的なことなのに過ぎないかもしれませんが、その中にあたたかさや優しさが満ちているところがステパノ学園らしさだと思います。

頼りになる友達、楽しい友達、助け合える友達。すてきな友達に囲まれて充実した学園生活を送る中で、きつとひとりひとりに新たな「ステパノ学園らしさ」が見えてくるはずですよ。

創立70周年に寄せて

教諭 和田 好江

聖ステパノ学園で働かせていただいた、二十九年になります。学園の区切りの今年、学園の歴史や自分が見てきたことについて深く考える機会となりました。

創設者澤田美喜先生は、「失われた子ども達の将来を取り戻す力を育む」ことを、前校長の小川正夫先生は、「子ども達一人一人が光の子として歩める」ように、この七十年の学園の歴史の中で、ここにいる子ども達をしつかりと見守って育てる、そこには信仰と希望と愛が存在します。目の前の子ども達の成長のために、誠実に全力で関わる。この現場に携わった一人の人間として、困難な局面に立ち向かい先生方と協力して何とかする、そういった気概のようなものに魅力を感じています。正門を入ったとたんに感じる安心感、自信に満ち前向きになろうと思える、みんなが一体になり繋がろうとする思いが湧いてくる、そんな場所です。また、この学園や周辺の自然環境を大切に思い、自然の中でなければ学べない多くの教育が好きです。

そして何より、子ども達が笑顔で、時には真剣な表情で本気で取り組む姿が見られた時が一番です。子ども自身が居場所を知ること、学園の存在意義があります。今後も前向きになんとかしていきたいです。

小学校1年生〜3年生は、「ままぢゃま」の肖像画を描きました。



小学校4年生は、ステパノ学園の「良い所」「好きな所」「紹介したい所」を教えてくださいました。



ステパノ学園の良い所は？

*キリスト教の学校がいいと思う。理由は、みんなが平和に暮らせると思うから。
*海が見えるところ。理由は、海があつて自然だから。

*校庭に十字架がある所が良いです。なぜなら、イエス様がいる気持ちになるからです。

*「森」虫がいるから。

*本がいっぱいある所（図書室）

分かりやすい本がいっぱいあるから。

*学校が小さいから迷子になりにくいところ。

好きな所は？

*海の見えるホールが好きです。理由は、景色もいし落ち着くからです。

*給食が、ごうかな所です。

理由はおいしいから。

*「トイレ」しずかに考えられるから。

*チャペル・席がいっぱいあるのと、十字架がきれいだから。

紹介したい所は？

*中学生の教室を紹介したいです。理由は、窓がガラスになっていて、とてもきれいでここがです。

*山を紹介したいです。山はどの学校にも無いとおもうから。

*自然が楽しめる。理由は、自然が好きだから。

*グラウンドです。なぜなら十字架やさくらの木があるからです。

小学校5年生〜中学校3年生による
ステパノ学園への思いを綴った作文集です。



ぼくの気に入っているところ

小学校5年 S・R

ぼくは、ステパノ学園の気に入っている所について紹介します。まず最初は、自然が多い所です。ステパノ学園は自然がとても多いので、空気がとても美味しいし、虫も沢山いるので、生命も感じられて、心がとても落ち着きます。

そして次は、先生の人数が多い所です。そのため、分からない事があつたら聞きやすいし、いつも自分たちを気にかけてくれているという安心感があります。

そして最後は、礼拝がある所です。そのため、神様を身近に感じられるし、いつも見守ってくれている気がします。なのでぼくは、ステパノ学園に入って本当に良かったと思っています。

六年間の学校生活

小学校6年 S・O

ぼくは一年生からステパノ学園で過ごしてきました。この学校にはいろいろな行事があ

ります。行事は、遠足、音楽会、ステパノまつり、運動会、マラソン大会、クリスマス祝会があり、その中で、ぼくが特に好きな行事は、ステパノまつりです。

一、二、三年生は、お客さんとして回り、四、五、六年生は、お店を出して、お客さんの接客をする所がとても楽しいです。

この学校の良い所は、六年間クラス替えがなく、一年生から一緒にいる友達と六年間勉強や、校内活動をしたり、毎日一緒に遊んだりできる所です。

また、違う学年と一緒に校外活動ができるのも魅力の一つです。校外活動では、海に行つて網を使って魚を捕ったり、シーグラスを集めたりします。捕った魚は大きい水そうかクラスの水そうに入れて飼うこともできるので、生き物を育てたり、観察をすることもできて、とても楽しいです。また、捕った魚の中には相性が合わない魚もいるので、その魚は海に返します。

ぼくの六年間の学校生活は、たくさん思い出と経験をする事が出来たかけがえのない時間でした。ぼくはこの学校に入って、優しい先生と楽しいクラスメイトに出会う事が出来たので、この学校に入って良かったです。

ステパノ学園

中学1年 I・N

私は小一のころからステパノ学園にいる中学生です。

私はステパノ学園の豊かで美しい自然の中で、私の好きな友達や先生といっしょにステパノまつりのことを考えたり過ごしたりすることがとても好きです。

先生方はとても優しく、生徒や人のことももちろん考えて、生徒のみんなも電車やバスで席を人にゆずったりと優しいです。

私は最初、どんな学校だろうと思ひ、入学しました。

不安でしたが、友達や先生と過ごしていくうちに不安も消え、全員と笑顔で過ごすことができて(時々けんかもありますが)とてもうれしいです。

ステパノ学園 七十周年を迎えて

中学2年 I・H

ステパノ学園創立七十周年おめでとうございませう。

僕は、岩崎山には幼稚園から、ステパノ学園には小学校一年生からお世話になっています。そんなこの学校も、澤田美喜先生が創

小学校校舎



ステパノ学園

立してから七十周年という長い年月が経ちました。そして、この七十周年を無事に迎えることができたのは、神様のお導きがあつてこそだと思えます。僕がこの学校に入学してよかつたと思うことはまず、大自然に囲まれて、守られた環境での勉強ができることです。

大自然での勉強は、とても心地よく、授業中にふと外を見ると、緑豊かな自然が僕らを見守ってくれています。特に中学校は岩崎山の中にあるので、休み時間においしい空気を吸うことで、気持ちが落ち着きます。

そして、周りには優しい友達がたくさんいます。学校に通うことにおいて僕は人間関係がとても大切だと思つていたので、少人数クラスのステパノは、後輩や先輩と関わることも多く仲が良いです。だから楽しく通えることができるので、とても良いと思つています。

あとは何といつてもイベントがとても楽しいということですね。遠足や祝会、運動会にステパノまつり等、一年中楽しみなイベントがいっぱいです。僕が一番好きなのは、ステパノまつりです。短い準備期間で出し物を考えて話し合つて作り上げる。そして本番で最高に盛り上がるという、大変だけどその分めちゃくちゃ楽しいイベントになっています。

しかしながら、コロナの影響で本来の形に戻り切れていないというのが現状です。なので、早く元に戻つて、皆に本来のステパノの姿を見てもらいたいです。

あと、ステパノのすごく良いところが、神様との距離がとても近いということです。制服に十字架が印されていて、毎朝の礼拝があり、聖書の授業が受けることができるので、神様、イエス・キリストの存在をとて身近に感じるができます。

他にもまだまだステパノの良い所はたくさんありますが、僕が伝えたいことは、ステパノ学園は安心して通える楽しい所ということです。なので、これからも安心して楽しく通つていきたいです。

これからもこの学校が長く続くことを、心から祈つています。

ステパノの魅力

中学3年 A・M

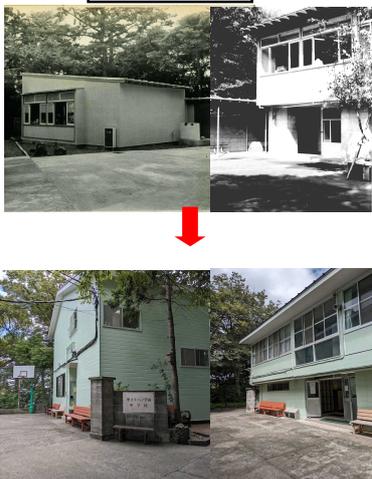
私の通つている聖ステパノ学園は、今年で七十周年を迎えます。このステパノ学園に私は通つています。この九年間過ごしてきた中で、ステパノ学園でしか経験できない事がたくさんありました。それらを紹介していきたいと思ひます。

初めに紹介するのは部活動です。ステパノ学園は小中一貫制なので、小学校と中学校との交流が多いです。その一例として部活動があげられます。小学校のうちから中学校の部活に参加することができます。また他の例をあげると、ステパノまつりがあります。ステ

パノまつりでは、他の学校の文化祭のように、生徒が出し物や発表に向けて準備をしています。また、他校と違うところは、小学校と中学校が一緒になって文化祭を行います。小生は中学生の出し物や、それに取り組む姿を見て学び、中学生は小学生の模範になるような姿を見せる良い機会になります。お互いが楽しみながら成長することができます。素晴らしい行事です。運動会も小中協働の行事です。これもお互い競い合い、高め合うことができます。特に紅白対抗リレーでは、小学校一年生から中学校三年生が協力して競います。私が小学生の時に見た中学生の走りは圧巻で、今でも忘れられません。また、ステパノ学園では少人数制を取り入れてあります。一学年が二十人前後の一クラスできており、入学から中学卒業まで共に過ごしていきます。少人数のため、一人ひとりがお互い理解し、支え合うことができます。気の知れた仲間たちがいるこのクラスは、私にとってとても居心地が良いです。以上のように、聖ステパノ学園ならではの良さがあります。私はこの大好きな学校が今までの良さを生かして、これからも続いて欲しいと思つています。

ステパノ今昔

中学校校舎



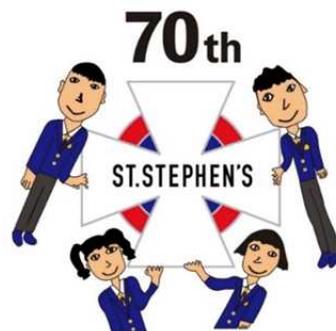
聖ステパノ学園 70 周年ロゴについて

70 周年記念にあたり、ロゴのデザインを在校生から広く募りました。一人ひとりが思いを込めて描いた作品は総数で 75 枚となりました。その中から下記の 4 種類を選出しましたのでご案内させていただきます。児童生徒がこのロゴへの思いも記してありますので、一緒にお楽しみください。



聖ステパノ学園は、緑の羽根が美しいアオバトが行き交う、自然の中にある学校です。恵まれた豊かな自然の中で、神様の愛に包まれ、どんなことにも挫けずに希望を持って前進しています。そんなステパノカラーを表現できないだろうかと思いながらロゴを制作してみました。学園の校章である十字架の上には、アオバトがとまっています。ステパノの校章をオリーブで囲み、背景の黄色は 70 周年を祝う希望の光。そこには天使がいることを表現しました。70 周年を迎えられたことへの深い感謝と共に、聖ステパノ学園はこれからも光の子らしく前進を続けます。【中 2 H・U】

このロゴにした理由は、聖ステパノ学園といえば自然なので、70 という数字の中に緑で色を塗ってステパノらしいものにしました。また、数字の中にステパノの校章を描きました。一目でステパノとわかるようなロゴが良いと思い描きました。上にはリボンをつけました。お祝い事なので、特別感を出したくて描きました。色々な思いを込めて描いたので、ぜひ見て欲しいです。これからも聖ステパノ学園をよろしく願い致します。【中 3 A・M】



私がこの 70 周年記念のロゴマークにアオバトを選んだ理由は、アオバトが聖ステパノ学園のある大磯の「町の鳥」に指定されているからです。そして、ハトは日本だけではなく世界的にも平和の象徴を表すものなので、これから先も聖ステパノ学園に通うたくさんのお子も達に、平和が続きますようにという思いを込めて描きました。【中 3 H・T】

僕は 70 周年記念イラストを描くにあたって「みんなで聖ステパノ学園を支えていきましょう」という意味を込めました。中央の校章が聖ステパノ学園。4 人の子も達が学園みんなを表しています。上部の 70th は、学園が 70 年続いてきたという意味です。これからもみんなで支え合って、聖ステパノ学園を盛り上げていきましょう！【小 6 H・N】

二〇二三年九月十九日(火) 発行第 279 号
<http://www.stephen-oiso.ed.jp>
 発行所 聖ステパノ学園小学校・中学校
 校長 佐藤 紀明
 ステパノだより編集委員会
 神奈川県中郡大磯町大磯 868
 〒255-0003
 TEL 0463-611-9739
 FAX 0463-611-1298

【編集後記】
 残暑が厳しい時期ですが、夜には涼しい秋風が吹き始めました。季節も世の中も少しずつ変化していきませんが、澤田美喜先生がお創りになったステパノ学園の本質は変わりません。こどもも大人もステパノに関わる全ての人がある精神を学び続けていくことが大切なのではないでしょうか。(り)

中学校旧校舎



チャペル



ステパノ今昔